「いじめ」問題への道徳性発達理論による アプローチの方法について

星野真由美

はじめに
Ⅰ　コールバーグの道徳性発達理論
　1．コールバーグ理論の基本的枠組み
　2．コールバーグ理論を支えている諸仮説
　3．コールバーグ理論への批判
Ⅱ　道徳性発達理論を用いた「いじめ」に関する研究
　1．道徳的葛藤場面における「いじめ」例話の持つ意味
　2．道徳性の感情的側面への着目
　3．道徳性発達理論のコミュニティへの着目
おわりに

はじめに

本稿の課題は、道徳性発達理論研究において、「いじめ」問題がどのように捉えられているのかを明らかにすることにある。そのことを通じて、「いじめ」問題に対して教育学研究および心理学研究が何をなしえるのかを考えていきたい。

近年、「いじめ」問題に対して道徳教育の立場からのアプローチが注目を集めつつある。「いじめ」問題に対する道徳教育からのアプローチは、以下の２つにおいて顕著である。

第１は、教育政策の動向である。文部省は1985年に主催した「『いじめ』問題に関する生徒指導推進会議」において、「いじめ」問題解決のために取り組むべき課題の一つとして、「学校における道徳教育の充実」を要請している。また、1987年の教育課程審議会答申においても、道徳教育が重要視されており、その背景の一つとして「いじめ」をはじめとする「児童生徒の問題行動の増加」が指摘されている。これをふまえ文部省では、1989年の学習指導要領の改訂にあたって、道徳教育に関しても以上の答申の方針に従い改訂がなされた。文部省は「いじめ」の問題解決のために、道徳教育を重視してきている。

第２の動向は、道徳教育研究・実践の動向である。雑誌『道徳教育』では、1985、86、94年に特集扱いで「いじめ」問題を取り上げている。どの特集も、道徳教育は「いじめ」問題解決には重要であり、「いじめ」の現状解決だけではなく、「いじめ」を発生させないような予防的な役割も担っていかなくてはならない、と「いじめ」問題と道徳教育の関係を捉えている。

しかし、これらの指摘や内容において、いかなる道徳教育をいかなる理論と方法に基づいて行っていくべきかについては十分な検討がなされていない[1]。とりわけ、現代の道徳教育理論の中で重要な位置をしめている道徳性発達理論と「いじめ」の関係については問題状況の整理さえなされていないのが現状である。

そこで本稿では、まず第Ⅰ章において道徳性発達理論を考案したコールバーグの理論の基本的枠組みを近年の研究成果をふまえて改めて整理し、その理論的枠組みに対して加えられた様々な批判についても概観したい。次に第Ⅱ章では「いじめ」問題について何らかのかたちで触れている道徳性発達理論に関する研究を取り上げ、それぞれの研究が「いじめ」問題をどう捉えているのか、道徳性発達理論から「いじめ」問題に対してどのようにアプローチしうるのか

を明らかにしていきたい。

Ⅰ　コールバーグの道徳性発達理論

1．コールバーグ理論の基本的枠組

コールバーグの道徳性発達理論研究は、子どもたちの道徳性形成に関わって規範の押しつけや徳目主義に終始しがちな状況を克服していくにはどうしたらよいのだろうかといった視点から始められた。彼の理論は道徳的価値を教え込むものではなく、役割取得によって子ども自らに「考えさせる」ことを通じ、道徳性の発達を促すというものである。

こうしたコールバーグの理論は、論文「道徳性の形成」(Kohlberg,1969) および、「『である』から『べきである』へ」(Kohlberg,1971) において確立したとの評価が一般的である[2)]。以下、この２つの論文の叙述を基にコールバーグの理論を要約してみたい。

コールバーグの道徳性発達理論は、認知発達的アプローチを道徳性に対して適用したものである。この認知発達理論とは、「認知的過程、即ち情報を処理し記憶する過程にみられる構造の質的変化を研究対象とする立場であり、構造の質的変化とは、その形式における変化を意味し、その内容となる要素や知識の変化と区別される。そして、その様な認知構造の質的変化を生み出す要因は、有機体と環境との相互作用の結果生ずる認知構造の不均衡－均衡化の過程である。従って、発達とはこの様な過程を通じての質的変化を意味する」(内藤,1977) と考える理論である。

以上のような認知発達理論、発達段階の基準を道徳性に関して適用して作成されたのが、道徳性の発達段階理論である。コールバーグは、認知的領域と同様、社会的－人格的発達の領域(＝道徳性) にも、発達段階、つまり、「順におこり、年齢と共に変わる構造上の変化」があると考えたのである。コールバーグの道徳性の発達段階理論の特徴は以下のようなものである。道徳性の発達段階は、自己と社会に関する考え方の枠組みの、認知－構造上の変化を表しており、その段階は、社会的な状況において、「役割取得＝他者の立場に立って考える」ときの様式が順に変化するところを表現している。個人は道徳規範を、「単に受動的に内面化するのではなく、能動的に対処し、自分の認知構造にあうように同化するものであり、同化の仕方、理解の仕方が発達上の問題」である。(Kohlberg, 1971)。

コールバーグは以上のような認知発達的アプローチに基づき、道徳性の発達段階を考案しようとした。道徳性の発達段階についてはすでにピアジェによる理論と発達段階モデルがあったが、コールバーグはこれをより発展させ、包括的で論理的に一貫した枠組みから成る次のような６つの発達段階を提唱している。

水準Ⅰ　前慣習的水準
　第１段階……罰と服従への志向
　第２段階……道具主義的な相対主義志向
水準Ⅱ　慣習的水準
　第３段階……対人的同調、あるいは「よいこ」志向
　第４段階……「法と秩序」志向
水準Ⅲ　自律的、原理化された水準
　第５段階……社会契約的な法律志向
　第６段階……普遍的な倫理的原理の志向

こうした段階は15年にわたる縦断的方法で、架空の葛藤場面に対する被験者の反応によって導かれた。その葛藤場面とは、次のようなものである。

ヨーロッパで一人の女の人がガンで死にかかっていた。ある薬を飲めば彼女は助かるかもしれなかった。その薬というのはラジウムの一種で、同じ町に住む薬屋が最近発見したもので、薬屋は、作るためにかかった10倍の値段の2000ドルの値をつけていた。

病気の女性の夫のハインツは、あらゆる知人からお金を借りてまわったが、薬の値段の半分しか集められなかった。彼は薬屋に彼の妻が死にかかっていることを話し、薬を安く売るか、または後払いで売ってくれるように頼んだ。しかし薬屋は承知しなかった。ハインツは絶望的になって、妻を助けるために、薬屋の倉庫に押し入り、薬を

盗んだ。ハインツはそうすべきだっただろうか。どうしてそう思うのか。

上のような、道徳的葛藤に陥るような例話をいくつか提示し、道徳的価値の葛藤にどう対処し、どのような判断を下すかを個人面談でみていく。その際問題であるのは、何を答えたか（内容）ではなく、判断のもとにある考え方（形式）である。

2．コールバーグ理論を支えている諸仮説

ところで、コールバーグ理論は、認知発達的アプローチを枠組みとしているが、道徳性の発達段階に適用する上で、コールバーグ自身によってたてられたいくつかの仮説によって成り立っている。個々の仮説の実証のための研究も数多く成されてきている。コールバーグ理論を理解するうえにも、これらの仮説と、主にコールバーグによる実証研究を概観してみたい[3]。

仮説①　各段階は一つの全体的構造をなす。従って、被験者の属する段階は、複数の葛藤場面及び、道徳側面を通じて一貫している。この仮説に対する実証的裏付けとして、コールバーグは、複数の葛藤場面に対する被験者の反応をもとにした葛藤場面間の相互相関が高いことを挙げている。

仮説②　発達は各段階を一定の順序に従って一段階ずつ進む。この仮説に対して、アメリカ合衆国の男子についての縦断研究によって、それぞれの子どもは道徳判断の段階を一歩ずつ進んでいくこと（段階の順序性）が示された。

仮説③　発達の速度に差異はあっても道徳性段階は普遍性をもつ。コールバーグらは、アメリカ合衆国、台湾、メキシコの都市に住む中産階級の男子、メキシコ、トルコの村落の男子の各年齢層における各段階被験者の割合を調査した。その結果、各国における年齢傾向の型は類似しており、すべての文化で道徳的思考に関する同一の基本的な型があり、その発達は同一の順序に従っていることを示している。

仮説④　段階の移行は現段階の認知構造に生じた不均衡の分化統合による再構造化によって生ずる。この仮説を実証する研究として、各段階に基づく道徳的根拠を要約するよう被験者に求め、自分の段階以外の意見をどのように要約するかを調べたレスト（1968；Kohlberg, 1971）の研究をあげている。この結果は、自分自身の段階やそれより低い段階の意見はすべて正しく要約できるが、自分より一段上の意見に関しては、すべての意見を正しく要約することはできず、自分より２段階上の意見は正しく要約できないというものだった。この結果は、段階の移行は、より低い思考様式に何かがつけ加わったものではなく、それを統合し、置きかえたものであることを示しているとコールバーグは指摘している。

仮説⑤　認知的発達は、それと対応する道徳性段階の前提条件であるが、十分条件ではない。コールバーグは、認知発達がより基本的なものとして各道徳性段階の前提条件となると考えた。これに関する研究の一つとして、ピアジェの認知発達段階とコールバーグの道徳性段階との対応を調べた。そして道徳的理由づけを行うためには、認知的に成熟していなければならないが、頭がいいからといって、道徳的な理由づけが行えるとは限らないという結果を見だしている。

仮説⑥　道徳性の発達は、社会的状況における役割取得の機会によって促され、その際の役割取得の様式を前提としている。この仮説に対する実証研究として、同輩集団への参加の高い子どもは、その程度の低い子どもに比べて、より速く、より高い段階へ発達し、同輩集団への参加の違いは、ある程度まではそれまでの家庭での役割取得の機会によって生じることを示している。

仮説⑦　道徳性段階の発達は道徳行為の発達を予測する。コールバーグはこの仮説を説明するために、ブラウンら（1969；Kohlberg 1971）の実験的研究を取り上げている。コールバーグの道徳判断テストによって、大学生の被験者を「慣習的水準」と「原理的水準」の２つの水準に分け、実験者が監督せずに試験会場から出ていった結果、原理的水準の被験者は、慣習的水

準の被験者よりも不正が少なかった。これは、特定の形式の道徳的行為が、前提条件として特定の道徳的思考を必要としているという意味であり、個人の道徳判断の成熟と、道徳的行為との成熟とが一致しているということを示す。

3．コールバーグ理論への批判

現在、以上のようなコールバーグ理論の基本的枠組みが作られてから25年余りを経ている。この間、コールバーグ理論は多くの支持を得た反面で、多くの批判にもさらされてきた。今日の「いじめ」問題に対するコールバーグ理論からのアプローチを検証していくためには、コールバーグ理論に加えられてきた諸批判にも光を当てておく必要がある。

様々な形で行われてきたコールバーグ理論への諸批判を整理する上で、最も基本的な文献が『道徳性の発達段階―コールバーグ理論をめぐる論争への回答―』(1983) である。同書は、コールバーグらが自らの学説に対する諸批判を網羅したうえで整理している。批判は主に以下の5点に分類されている。

①構造主義的方向に偏重しすぎている。道徳的推論を純粋に形式的・構造的な視点から説明することが有効なのか、またこの視点から完全に説明できるのかに関して、見解の不一致がみられる。

②道徳性の文化的相対主義の立場からの、発達段階の文化的普遍性という心理学的な主張に対する批判がある[4]。西欧文化圏の者の方がそれ以外の文化圏の者よりも高次の段階に達する者が多いという結果、また西欧文化圏内でも男性の方が女性より高次の段階に達する者が多いという結果が指摘され、そこからコールバーグの理論が特に西欧男性社会で課せられる課題を解くために求められる文化固有の道徳であるという指摘がなされた[5]。

③コールバーグの理論は、道徳的感情や意志といった要因を無視して、道徳的な推論や認知から道徳的段階を規定している。

④道徳的ジレンマが実際に生じる現実的・個別的な社会関係や社会状況の絡みあいから個人の推論のみをとりだして、その分析を行なうという方法に固執している。

⑤道徳的成熟に関するコールバーグの考え方は、個人の権利の尊重や公正といった理念を強調するが、その一方で他者に対する人間的な配慮や責任といった概念、理想的コミュニティといった概念を無視しており、それゆえ不十分なものである。

こういった批判点の中で特に③、④、⑤の内容は、道徳性発達理論から「いじめ」問題にアプローチする際に特にふまえておくべきものである。コールバーグ理論は架空の道徳的な葛藤場面における公正推論がどういう原理に立つかによって発達段階を規定している。そしてその認知的発達を促すことが実際の道徳的行動にも繋がるというものである。この理論には道徳的判断の過程を構成する要因、たとえば感情や意志、特定の人間関係や状況といった要因は含まれていない。「いじめ」場面における道徳的判断を実際に行う際、道徳的な推論よりもその時の感情や状況といった要因の方が大きな影響をもつであろうことは予想されることである。また、コールバーグは個人の権利の尊重や公正といった概念を強調したが、理想的コミュニティといった概念を無視しているという批判もなされている。「いじめ」問題においても何が正しいのかという個人の公正推論だけが問題というよりも、集団の質や力が大きな影響を及ぼしている。

批判と反批判を重ねる中で道徳性発達理論研究も様々な展開をみせ、コールバーグ自身が批判を受けて彼の理論を部分的に修正、補完させたり、他の研究者たちによって新たな展開がなされたりした。その後コールバーグは、批判④、⑤に関してはジャスト・コミュニティ（次章で触れる）という実践を行い、その理論の修正を行っている。

II　道徳性発達理論を用いたいじめに関する研究

本章では「いじめ」問題に関してなんらかのかたちで触れている道徳性発達理論に関する研

究のうち、著者が注目すべきものとして３つの研究をとりあげたい[6]。これらの研究においては、それぞれの文脈の中で「いじめ」問題への触れ方に違いや共通点が見られる。また、前章で概観してきたコールバーグの道徳性発達理論に対するスタンスがそれぞれ異なっており、また各主題の中で「いじめ」問題をどう扱っているか、あるいは何を意図して「いじめ」問題に触れているのか、それぞれの研究から「いじめ」問題にどのようにアプローチする可能性があるのかといった点などにも個々に特徴がある。以上の違いを明らかにしていきながら、「いじめ」問題への道徳性発達理論によるアプローチの方法について考察していきたい。

１．道徳的葛藤場面におけるいじめ例話の持つ意味

宗方ら（1985）は、アイゼンバーグ（1982）によるプロソーシャルな道徳的判断の発達を追試した研究において、「いじめ」を例話に用いている。アイゼンバーグによるプロソーシャルな道徳的判断とは、基本的にコールバーグの提起した道徳的判断の発達理論の枠組みに基づいたものである。アイゼンバーグ（1989）は、プロソーシャルな行動（向社会的行動）を、「他の個人や集団を助けようとしたり、こうした人々のためになることをしようとしてなされた自主的な行為」と定義し、他者への配慮、寛容さ、親切さといった道徳性のポジティブな側面に注目し、それらの判断や行為を決定する基本的な認知的過程としてのプロソーシャルな道徳性の発達段階を提唱している[7]。これは、コールバーグの考え方は個人の権利や公正といった理念を強調しているが他者への配慮や責任といった概念を無視している、という批判の立場に立った研究のひとつである。

宗方らは、アイゼンバーグの研究の追試を行うために４つの例話を作成し、それに対する反応から、日本の子どもたちの道徳性の発達を調査しようとした。４つの例話はいずれも窮地に立った登場人物を助けるべきかどうかを主人公が決断する場面が描かれている[8]。その例話のひとつとして、「いじめ」の場面が用いられている。それは以下のようなものである。

［例話(2)］　ある日、次郎君が学校のうらを通りかかったら、強そうな男の子が３人で、１人の男の子をとり囲んで、いじめていました。その子は、次郎君を見ると『たすけて！』と頼みました。でも、いじめっ子たちは、大きくて強そうなので、自分も一緒にいじめられるかもしれません。

このような場面で「主人公はどうすべきなのか（行動判断）」「なぜそうすべきなのか（判断理由）」という質問がなされる。その理由をもとに各例話に対する発達段階が決められ、各例話に対する段階を総合して最終的に各人の発達段階が判定される。その結果、宗方らはアイゼンバーグの結果と同じように、日本の子どもにおいても発達レベルの順序性の傾向が見られたという考察を導いている。このように宗方らの研究ではいじめの場面を「プロソーシャル」な行動をさせる場面のひとつ、発達段階を測定するための材料のひとつとして用いているにすぎず、いじめ問題の分析や「いじめ」解決へのアプローチを直接目指したものではないのである。

しかしながらこの研究には「いじめ」に関する興味深い指摘がなされた部分もある。ひとつは「主人公はどうするべきなのか」という質問への判断を「全面的に助ける」「条件付きで助ける」「助けないあるいは知らない顔をする」という３つの反応に分けた結果である。宗方らはいじめに関する例話に対しては「目上の人（先生や父母など）を呼びに行き、その人たちに助けてもらうという判断」（＝「条件付きで助ける」）が他の例話に比べ多く見られる（いじめ；44%，他の例話；(1)0%，(3)17%，(4)21%）ということを指摘し、「『自分も一緒にいじめられては意味がない』という理由に見られるように、その場の状況を考慮した実際的な判断を示していると考えられる」とコメントしている。

ふたつめの指摘は「判断理由」の反応の分析の中でなされている。いじめられている子どもを助ける状況では、他の例話に比べ、「『快楽的

でない実際主義』に相当する反応が多く、…『他者の要求への関心』に相当する反応が少なかった。」と指摘している。『快楽的でない実際主義』とは、「大人の人を呼んだ方がいいから」「自分も一緒にいじめられては意味がない」という理由に見られるように、その場の状況を考慮した「実際的」な判断を示すものが分類されている。また、『他者の要求への関心』は、「けがをしているから」というような『他者の身体的物質的要求』への関心や、「悲しいだろうから」というような『他者の心理的要求への関心』が示されている判断理由が分類されている。アイゼンバーグの研究によると、『快楽的でない実際主義』より『他者の要求への関心』の方が高次の反応であり発達段階でも高次のレベルとみなされる[9]。つまり、「いじめ」の例話では他の場面に比べ、「他者への道徳的な配慮」よりもむしろ「利己的、実際的な結果を志向」してしまうことが多く、道徳的な発達段階では低い段階の志向が多いということが示唆された。

このような結果は当初宗方らが意図したものではなかったが、架空の道徳的葛藤場面の中で「いじめ」の場面での判断には何らかの違いがあるということを示唆するものである。しかし宗方らの研究の主目的は例話ごとの比較にあるのではない。4つの例話に対する反応を総合した結果から発達段階を求めることによって、「いじめ」の例話に対する反応は最終的に他の反応と平均されてしまうのである。しかしながらこのような道徳性発達理論に基づいて子どもの道徳性の発達を促していく場合、そのことが特に「いじめ」問題に対しても有効なのか否か、という問題を宗方らの研究ははからずも提起したものとなっている。

2．道徳性の感情的側面への着目

発達の日米比較にもとづいた研究を行なっている東（1994）は、コールバーグの道徳性発達理論と「いじめ」問題との関係を次のように述べている。

> 先日ある中学校で、養護学校から普通学級に移ったひとりの女の子がしつこいいじめに遭い、あげくの果てにいじめ殺されるという痛ましい事件があり、テレビでその周囲の事情を特集していた。その中でその中学校の卒業生にインタビューをして、在校当時養護学級の生徒やそこから移ってきた生徒をいじめるのに加わったかどうか聞いていたが、加わっていたという少年が、「どうしてやったのか」と問われて、「はじめは止めていたのだけれども、やり出したらおもしろかったから」と答えていた。
>
> そこで深刻に感じたのは、彼がそれで「どうして」という問いに対する答えになっていると信じて疑わないらしいことであった。問いは明らかに道徳的な視点に立つ問いである。中学校を卒業しているのだから少なくとも15歳以上になっていたであろうその少年に、それはわかるはずだし、わかったからこそ「はじめは止めていた」といったのだろう。ところが道徳的視点はそこで切れてしまって、「だけれどもおもしろかったから」という感性的説明に変わってしまう。この少年の声の調子からは、それをおかしいと感じている気配はなかった。その殺された生徒をいじめていたグループの言い分も、彼女が「汚かった」からだというのだった。

道徳性発達理論と「いじめ」の関係について、上の引用の中で、東が述べているのは以下の2点である。ひとつは、「道徳的評価」と「感性的評価」とを分けて考えていることが挙げられる。東によると、「道徳的（原則的）評価」とは、「人（または自分）はこうあるべきだ」という認知的な基準に関係する評価であり、論理的で、人に対してその判断を正当化する構えがあるものである。コールバーグ理論で問題とされるのはこの判断である。一方それに対して、ここで東が述べている「感性的評価」とは、「快い」「落ち着く」「ぴったりする」など情意的な適合感に基づき、基本的に主観的で、人に対する影響力はあるにしても論理的説得力は持たない評価であるという。コールバーグは、こうした感性的な面を意識的に排除していると東は述べている。これはⅠ章でも触れたように、認知的側面のみによっていて、道徳的感情や意志といった要因を無視していると批判されている点であ

る。東はコールバーグが対象とした認知的な側面だけではなく、新たに「感性的」な評価を設定して「いじめ」の問題を分析している。

東は、この少年の答えを「道徳的（原則的）評価」から導かれた部分と、「感性的評価」から導かれた部分とに分けている。少年は「いじめはするべきではない」という評価を持っており、だから、「はじめは止めていた」と答えるが、「道徳的評価」に基づく理由づけというのはそれ以上述べられず、「おもしろかったからいじめた」という情意的で主観的な「感性的評価」に変化するというのである。

特徴の２つめは、「いじめ」への是認は、「感性的評価」に基づいているというものである。

以上のような、「いじめ」に対する問いへの姿勢を東が問題であると考えるのは、このような「感性的評価」による「道徳的評価」のすり替えが「いじめられる方にも原因がある」といういじめ是認へつながることだという。

東は、この「感性的評価」を全面的に否定しているわけではない。「感性的評価を道徳的評価に完全に従属させてしまうと、自分の道徳観に合わないものには全く不寛容になり、考え方が一本調子になり、美意識も貧困になるだろう」と、「感性的評価」の必要性も論じている。しかし一方、両者が分離して、しかも「感性的評価」に重みが偏ると、筋を通した道徳的批判が行われなかったり、ないがしろにされたりするおそれがある、という。日本での「いじめ」や差別の問題に対する人々のあいまいな姿勢の一因は、「感性的評価」がまざり混み、「道徳的評価」があいまいなものになってしまうことにあるのではないかと東は指摘している。

コールバーグは道徳性の発達段階は文化を通じて普遍的である、という仮説から出発している。これにはギリガン（1982）や山岸（1976, 1985, 1987）らから、文化相対的なものであるという批判がなされる。つまり、コールバーグの発達段階は欧米男子による発達段階であり、女性や日本には別の発達段階があるとする立場である。これらに対して、東は文化によって異なる道徳性が存在するのではなく、コールバーグ的な原理的普遍的な道徳性と感性的な判断の二重の構造をもっているのだと指摘する。

東の見方はコールバーグの強調する道徳性に「感性的評価」がまざり混んでしまうことが「いじめ」や差別に対するあいまいな評価に通じるというものであり、道徳性発達理論を使って「いじめ」問題を捉えることに総じて積極的な意義を認めたものであることが理解される。しかし、東の立論を注意深くみてみると、コールバーグが作った道徳性発達理論だけでは「いじめ」に関わる子どもたちの道徳性の把握が困難であることを逆に明らかにしている。そのため東は道徳性の認知的原理的側面に加えて感情的側面を示す「感性的評価」なるものを用いているのである。さらに東は各文化にひとつの道徳性が存在するのではなく、道徳性の認知的原理的側面と感情的側面の二重の構造が存在すると指摘している。「いじめ」の問題もこの二重の原理のバランスの問題であると述べている。

３．道徳性発達理論のコミュニティへの着目

次に、岩佐の例を挙げる。岩佐の論文はコールバーグの理論・道徳教育実践の紹介と日本の道徳教育での応用の仕方についての考察が主な目的である。その中で、岩佐は、「いじめ」と道徳性発達理論との関係を二つの方面からのべている。

一つは、東と同様に、ジャスティス（公正・公平）に基づく議論がないためにいじめは是認されてしまうということを指摘している。感情論とは別に正しいかどうかの議論の必要性を説いている（岩佐，1994b）。

もう一つは、コールバーグ理論に基づく実践との関わりでふれている。「ジャスト・コミュニティ」の理念を受け止めた実践を行い、道徳性を発達させるためには、日本の道徳教育では「いじめ」の問題にこそ取り組まねばならないと岩佐は述べている（岩佐，1994c）。

コールバーグは、自らの理論を道徳教育として実践にうつすために、まず「道徳討論プログラム」を考案した。これは、授業の中で架空の道徳的ジレンマの討論を行い、より高次の意見

に触れることにより、個々人の道徳性の発達を促すというものである。この実践に関する研究が、ブラッドとコールバーグによってなされ、この実践によって「ブラッド効果」といわれるような発達段階の向上が得られた（岩佐，1993；内藤，1985）。しかし、この実践は現場の教師たちから、学校での実際的な生徒たちの問題行動の解決には役立っていないとの批判を受けるようになる。架空の道徳的ジレンマの討論による道徳的推論の発達が、現実の問題に対する道徳的行動とは直接結びつくものではなかったというのである（岩佐，1994a）。

こうして、コールバーグは個人の認知的な側面にのみ焦点を当てた方法を反省し、新たに、身近な道徳的問題をコミュニティの問題として取り組み、そのことを通じて、個人の発達のみではなく、コミュニティの道徳性の発達をも目標とする「ジャスト・コミュニティ」と呼ばれる実践を考案した。宗方らや東とは異なり、ここに岩佐は注目するのである。

このアプローチは、「個々の生徒の権利を保証し、その道徳的成長を促すとともに、強力な集団の影響力をも導入しようとした」ものである（Higgins,1985）。これは、生徒たちが、自分たちの段階よりも高いと感じているような校風を持った学校では、自分たちの段階と同じか、それ以下と感じているような校風を持った学校よりも、道徳的向上が多いであろうという仮説から出発している。コールバーグは、道徳性の発達を促す要因として、以前から指摘していた役割取得の機会とともに、適切な道徳的環境の必要性をあげた。その道徳的環境は、一言でいえば、「直接民主主義」に基づく学校組織によって導かれると考えられた。このように、コールバーグは、「直接民主主義」に基づき、個人の道徳性の発達を促すとともに、道徳的な、あるいは公正な集団・社会を作ることを目指した。そして、公正な共同社会は個人の道徳性発達を促すという点で重要であるが、集団の道徳的発達もそれ自体重視されるようになった。

「ジャスト・コミュニティ」によって進められた道徳教育について、岩佐（1994c）は、「その形式や方法に目を奪われると、日本の学校には、全く異質なものと受け止められ」、日本の学校ではそのまま試みるのも困難であろうと指摘している。しかし、「ジャスト・コミュニティ」の学校の理念は、日本の学校において、「今こそ真剣に受け止められなければならない」という。そして日本の道徳教育について、コールバーグが「ジャスト・コミュニティ」の理念からコメントするとすれば、「いじめ」の問題にふれ、次のようにコメントするだろうと岩佐は考察している。

> いじめは、単に、個人の問題というより、クラス全体の問題ではないでしょうか。このクラスの中では、だれかが、だれかをいじめの対象にしたり、そのようなことを見て見ぬふりをするといったことが起こりえないような信頼関係を築かなければならない、と、生徒たちが、考えるかどうかの問題ではないかと思うんです。

「いじめ」が基本的に、クラスの子どもたちの人間関係の在り方の問題であり、「いじめ」は子どもたちの道徳性に直接かかわる問題として捉えなければならないというのである。このことが、子どもたちにとって、極めて身近な道徳問題であり、このような問題に取り組むことを抜きにして、子どもたちの道徳性の向上はありえないといえると岩佐は指摘している。

おわりに

道徳性発達理論からいじめ問題に対し如何に取り組んでいけるのか、その限界と可能性について検討してきた。

宗方らの研究がはからずも示していたのは、「いじめ」場面の例話についての道徳的判断が同一人物において他の場面の判断よりも低い段階にスコアされるということだった。これは、コールバーグの基本仮説、「被験者の属する段階は複数の葛藤場面及び、道徳側面を通じて一貫している」から反れるものであるため、宗方自身の研究によっては十分に検討されていないが、「いじめ」と道徳的判断についての関係を見るうえで重要である。「いじめ」場面での認知的・原理的判断が他の道徳的場面と多少なりと

も異なるというのはいったい何故なのか、探っていく必要があろう。そのうえで、認知的な道徳性発達のみで、「いじめ」がなくなるのかどうかという問題を考えねばならない。

東の見方は道徳性発達理論を使って「いじめ」問題を捉えることに総じて積極的な意義を認めたものである。しかし、コールバーグが作った理論だけでは「いじめ」に関わる子どもたちの道徳性の把握が困難であることを逆に明らかにしている。東は道徳性の認知的原理的側面に加えて感情的側面を示す「感性的評価」を加え、この「感性的評価」に基づいて「いじめ」の是認がおこなわれていると分析している。「いじめ」に関しては、他の道徳的場面に比べ「感性的評価」により重みが偏っているということが実証されれば、コールバーグの道徳性発達理論では軽視されてきた感情的感性的側面へのアプローチは必須となるであろう。また「いじめ」の場面では、コールバーグの「道徳的評価」と、東のいう「感性的評価」がどのように関連しあっているのかも知る必要があろう。さらに東はコールバーグ理論の基本的仮説のひとつである道徳性の普遍主義、及びそれを批判した文化相対主義的な捉え方に代わって道徳性の認知的原理的側面と感情的側面の二重の構造が存在すると指摘し、「いじめ」もこの二重の原理のバランスの問題であると述べている。この点を明らかにするためにも今後「いじめ」に関する国際比較的視点が必要となるであろう。

岩佐はコールバーグ理論との関係で２つの問題を明らかにしている。ひとつは東と同様に日本のいじめの問題は感情面の影響が強いというものである。もうひとつはコールバーグの「ジャスト・コミュニティ」理論に注目していじめの問題にアプローチしていることである。岩佐は日本において子どもたちの最も身近な問題である「いじめ」をコミュニティ全体の問題として捉えることが必要であり、そうすることが子どもたちの道徳性の発達に不可欠であると指摘している。岩佐の研究では具体的なコミュニティの質や内実についての検討はなされていない。「いじめ」の実態分析においては集団へのアプローチの重要性がすでに指摘されてきているが、道徳性発達理論から「いじめ」を捉えるときにも、集団への着目がなされつつあることは興味深い。

今や正面きって「いじめ」や差別を肯定する人はいない。しかし、多くの人々が「いじめ」や差別に走る。たてまえと本音、あるいは行為の分離である。道徳に関する認知的発達が高まれば実際の道徳的行為と結びつくものもあるだろう。しかし、「いじめ」の問題は認知的側面の発達自体を促すことも難しいし、行為としての表出はより一層難しいであろう。道徳性発達理論がこうしたたてまえの教育に終始してしまう可能性をはらんでいることが本稿から明らかになった。そしてそれと同時にこうした限界を克服する理論的営為の萌芽が道徳性発達理論の内側に見出だされることをあわせて明らかにした。

注　記

(1)その内容は、個々の学校での「いじめ」問題対策案、「いじめ」を解決・予防するための授業の指導方法実践例である。文部省学習指導要領の「内容」のいじめ問題に関連する価値項目（「親切同情」「正義勇気」「公平公正」など）を子どもたちに理解させるよう考案されているものが多い。

(2)コールバーグの初期の理論については、山岸（1977）や、内藤（1977）の論文も詳しい。これらには、コールバーグ理論の紹介とともに、日本を含む各国でのコールバーグ理論に対する検証的実験も解説されている。

(3)仮説の分類は内藤（1977）を参考とした。

(4)日本においても、文化的普遍性に対する検討研究がなされている。隈元（1990）は、文化的相対主義克服のひとつの試みとしてコールバーグ理論の意義を明らかにしようとし、そのような観点からコールバーグ理論の問題点を指摘している。内藤（1984）は、コールバーグ理論の文化的普遍性という仮説について、その実証的妥当性を検討し、いくつかの限界を指摘している。

(5)岩佐（1993）によると、ギリガンの論文「In a different voice」（1982）は、すでに定評のあったコールバーグの道徳性発達理論に対して、女性の立場からの問題提起として、大きな反響を呼ん

だ。ギリガンは、『ミズ』という有名なフェミニズムの雑誌により、その年に最も顕著な活躍をした女性として、ウーマン・オブ・ザ・イヤーに選ばれたという。この論文は日本でも訳出されている。：Gilligan,C.（岩男寿美子監訳）1986『もうひとつの声－男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティー』川島書店

(6)道徳性発達理論に関する研究で「いじめ」問題に触れているものは少ない。

(7)コールバーグによる道徳性発達理論は「罰、規則、法律、権威、形式的義務などの問題を含んだ道徳的ジレンマについての判断であり、禁止に方向づけられた側面しか扱っていない」とアイゼンバーグは指摘し、「道徳性のポジティブな側面についての道徳的判断の研究が必要であるとして、罰や規則などが強調されない文脈で、自己の要求と他者の要求とが抗争する場面についての道徳的判断」の研究の必要性を説いている。

(8)例話はそれぞれ以下のような場面が描かれている。(1)誕生会に急いで向かう途中、自転車で転んだ子を助けるか否か,(2)自分もいじめられてしまうかもしれないがいじめられている子を助けるか否か,(3)1週間くらい入院しなくてはならないが普通より多くの献血を承諾するか否か,(4)自分たちも飢えてしまうかもしれないが災害にあったとなり町の人々に食べ物をわけてあげるか否か

(9) アイゼンバーグはまず判断理由を10のカテゴリーに分類し、そのカテゴリーを発達段階のレベルに換算している（たとえば、カテゴリー①～③はレベルⅠに換算）。プロソーシャルな道徳的判断の発達レベルは6つの段階が設定されている。

文献

Eisenberg,N. 1982 The development of reasoning regarding prosocial behavior In N. Eisenberg (Ed.) The development of prosocial behavior, Academic Press.

Eisenberg,N. & Mussen,P. 1989 The roots of prosocial behavior. Cambridge- University Press. 菊地章夫・二宮克美（共訳）1991 思いやり行動の発達心理 金子書房

東 洋 1994 日本人のしつけと教育 ― 発達の日米比較にもとづいて ― 東京大学出版会

Higgins,A. 1985 Moral education in America アメリカの道徳教育 岩佐信道（訳）1987 道徳性の発達と道徳教育 ―コールバーグ理論の展開と実践― 広池学園出版部, 145-170.

岩佐信道 1993 コールバーグの道徳性発達論と道徳教育（8） 道徳教育, 11月号, 113-118.

岩佐信道 1994a コールバーグの道徳性発達論と道徳教育（12） 道徳教育, 3月号, 113-118.

岩佐信道 1994b コールバーグの道徳性発達論と道徳教育（15） 道徳教育, 6月号, 113-118.

岩佐信道 1994c コールバーグの道徳性発達論と道徳教育（18） 道徳教育, 9月号, 113-118.

Kohlberg,L. 1969 Stage and sequence: The cognitive-developmental approach to socialization. in Goslin, Handbook of socialization theory and research. 永野重史（監訳）1987 道徳性の形成 新曜社.

Kohlberg,L. 1971 From is to ought: How to commit the naturalistic fallacy and get away with it in the study of moral development. in Mischel, Cognitive development and epistemology.「である」から「べきで ある」へ 永野重史（監訳）1985 道徳性の発達と教育 ―コールバーグの理論の展開― 新曜社.

Kohlberg,L.,Levine,C. & Hewer,A. 1983 Moral Stage: A Current Formulation and a Response to Critics. Karger. 片瀬一男・高橋征仁（訳）1992 道徳性の発達段階 ―コールバーグ理論をめぐる論争への回答― 新曜社.

隈元泰弘 1990 コールバーグの道徳教育思想 ―文化的相対主義の克服をめざして― 佐野安仁・荒木紀幸（編） 道徳教育の視点 晃洋書房, 219-248.

宗方比佐子・二宮克美 1985 プロソーシャルな道徳的判断の発達 教育心理学研究, 33, 157-164

内藤俊史 1977 コールバーグの道徳性発達論 教育心理学研究, 25, 60-67

内藤俊史 1984 道徳性発達段階の文化的普遍性について お茶の水女子大学人文科学紀要, 39, 117-139.

内藤俊史 1985 コールバーグの道徳性発達理論に基づく道徳教育の実践 永野重史編 道徳性の発達と教育 ―コールバーグの理論の展開― 新曜社, 223-241.

山岸明子 1976 道徳判断の発達 教育心理学研究, 24, 29-38.

山岸明子 1977 道徳判断に関するKohlbergの理

論とその発展　心理学評論 ,20,348-368.
山岸明子　1985 日本における道徳判断の発達 永野重史編 道徳性の発達と教育 —コールバーグの理論の展開—　新曜社 , 243-267.
山岸明子　1987　コールバーグ理論の新しい展開 —主としてギリガンの批判をめぐって— 永野重史編 道徳性の形成 —認知発達的アプローチ—　新曜社 , 193-208.